

繪本拾遺信長記  
前篇  
八

特別  
13  
2507  
8



遠  
2507  
23-8

繪本拾遺信長記初篇卷之八

目録

氏家入道ト全討死之事

長瀨の一揆信長ヲ降ると追討死

氏家入る討死

弓削修理女強勇討死

信長焼延暦寺事

日圖

宇治橋渡合戦之事

繪本拾遺信長記

目録

円圖

刀根坂合戦山崎長門守討死之事

信長之熱誠を妻房氏

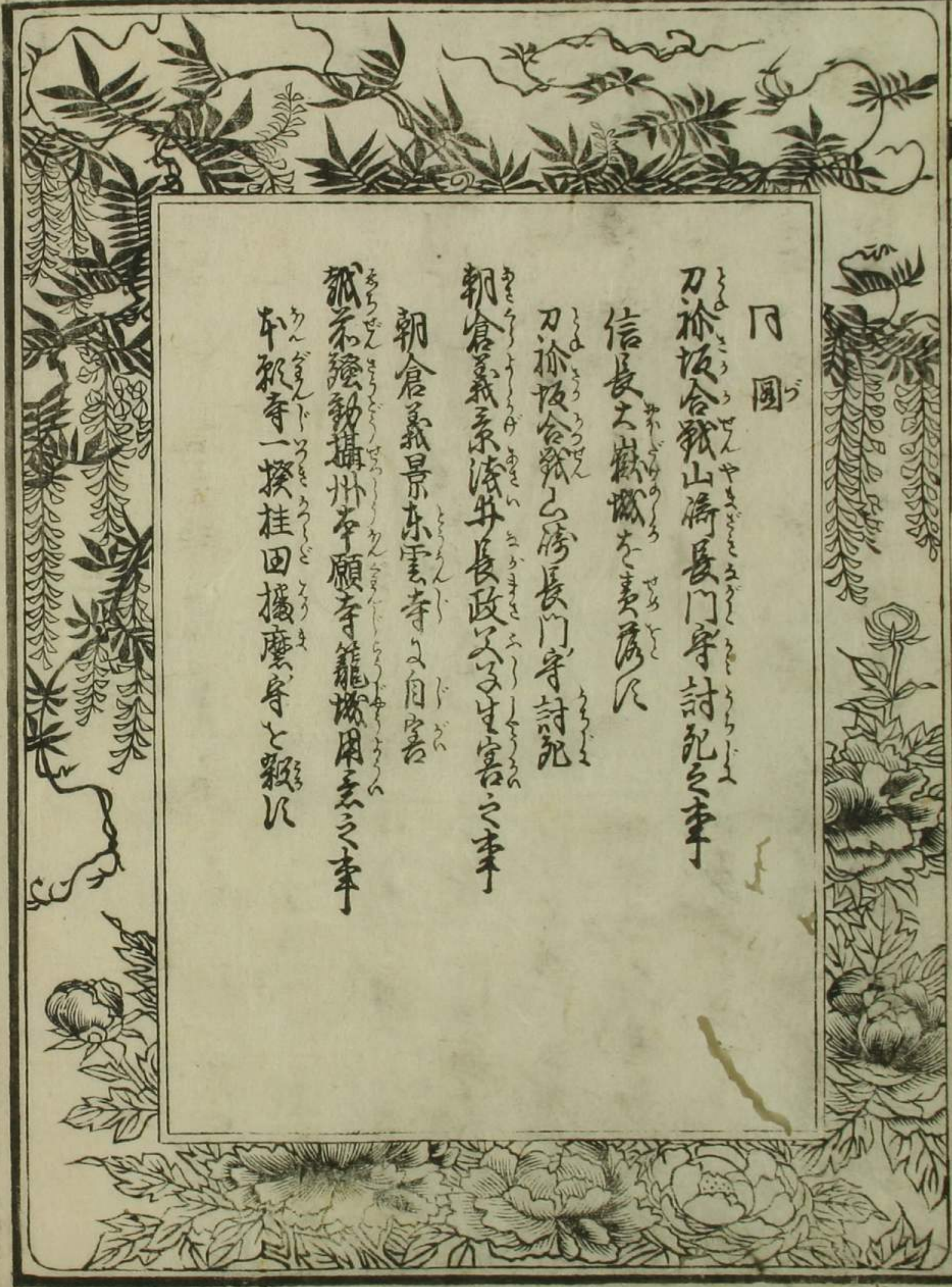
刀根坂合戦と長門守討死

朝倉義素清井長政父子生害之事

朝倉義景東雲寺より自害

祇園寺勅攝州守願寺籠城用去之事

本願寺一揆桂田攝摩守と殺死



繪本拾遺信長記初篇卷之八

氏家入道下令討死之事

川の門後等本下後右郎が武勇又陣とさるんが一揆のるるを  
を初度の合戦に敗陣し再び戦ひんをさるん心くはなれ  
暫く一揆を釋りたる家又勢州長崎一向宗の一揆の去る信長の  
金身義七郎と討死其勢い強大なりしやが小信長先を征  
伐せんとも同年八月十日又一万余騎の大軍を率し長崎へ出馬  
あるは長崎の地形多に四方皆大河三をに争に流し人馬の並  
引自ゆるざる切なるる小勢安き門後の多勢へきりし極に捕  
獲せり歎とせりは激しく戦ひ一處に逃散せんともなごのりし初  
かけより信長は体を刀で撥とお送し左右を顧みてやゆる





あり後し二揆いしが構りうらるる是等の城と速く斬平んすは  
 味方の人数を換じど先試しよ一妻せめて強弱を伺ふ中とて  
 熱海いさくと川と渡し園を作て妻せせり城中待ますはけ  
 うらるるれが敵子の鉄炮筒先とらるる雨よりあげく敵らうけ  
 ひろむ石火見海しと騎馬の武者二ふりうらると喚ひて証出  
 毎二毎三は突まれば小田惣惣しまたけりえびんうらして引  
 を斬之突之追討わらふ或馬は証例され或は川中へ追返さる  
 討り者又百余人城兵のうらぐと軍勢を引上げ城門と固め  
 矢炮と隊勢が再び打崩さんと聲のひびくはしめあうがく  
 をかんよつる信長元來場取功者の大なるれがは城力妻は落  
 さんとせば味方の兵士と換じらるるのうらぐは二揆系成妻らひうら

今又後指さくまへは橋うらぐは勝ぬいさかからうらる肉よ一先軍勢  
 を引をらひきて征伐とどしとく十二日の未明より軍勢の城と  
 突り本園としてまゆくと引をる城中より是と刀をくとい信  
 長は圃と解く退くぞ追うけり討たさやと血丸の若者一子余  
 徳をえくふく追うらるる小田方小も今日の退はるるのうらと信長  
 が陣一の勇臣柴田権六郎勝家後殿しと退きしよ一揆系が追討  
 心得たりと小まると岸より鉄炮の村人と並べると一日は打ら  
 せせ炮烟の中より槍爪へ三町半突まると二揆系えんくはあせ  
 礼とまら勝家急な勢とまらあうらぐと引にしが何とけしん  
 令知布の馬車と敵兵の中よえ落し最う勝家が小姓よ水槍  
 治右衛門とらふ若け時十六也の少事としが只一人敵の中へきては



被馬印とて多く徐々と進め其勇猛と恐らくや一揆等放  
 て是と追ひ勝家希代のるる名と稱養して母衣と袂けと籠  
 大ねらぬしぬるわど小長瀬の二揆に小田勝と喰止人と五六十  
 艘の舟を押し大回川と一帯に下り勝家の横をまより弓  
 矢炮と絶回くおくりは家より討り兵士殺と知り勝家  
 右の左股を討させさぐ漸二十町斗引えろろ小作賀守入  
 船てえんぐと戦ひ双方討死殺し一揆賀守と又源をを  
 岸して引れられ氏家若降入るト令作賀守を討て後殿して  
 退く不に口も恐るる大兩車船と流して降来る小一揆系いよく  
 多勢とぬく用と化つて退来るト令が子の若後回信濃守官  
 川佃馬守飯沼勘平西尾小六等必死とぬく戦ふとすとも勝

家  
 信長

勝一葉内知ぬ地をれ討死に負其殺とては氏家ト令  
 家臣桑原右近西極勘左衛門と大回村と引渡しはははの二揆  
 と押ひはし一揆に八方より切立とバト令は後家又踏歩勇と  
 ろろろと戦ふと人も小勢とて殺射の戦ひはははの二揆と  
 ははは後兵士三千余人討死に極は討死に飯沼勘平ははは  
 て戦ふと小ト令が討死も知りは群り来る大勢とまより  
 一揆の大ね下回三佐とる者を討死引退んくはははと  
 多勢の二揆より門より門付とひをりも殺すおのなと扇  
 く退きくひく見へるをを麻呂三郎左衛門桑原三郎守  
 二百余人とて敵く交へ勘平を殺し約尾村と引れははは  
 よ二三とびぎ雨は跡まよりと改て死うとはははの二揆も家より





退去す物別遣して退散せり爰より令が道士より削修理  
 亮との者生年十八歳主人の在ぬ討死し終つんと只一騎を  
 て久せば一揆づくに八百人林の内より雨を凌ぎて休み居り  
 狸亮大者小押のより悪き一揆系くる我主人のづくは地を  
 我の弓削修理亮とく大勇の兵より自の厚意取報えんた  
 只今討死をとるぞ我とてらん母系来とやきとれと叫りてに  
 大勢の其中へ今秋もろく切て入候様は荒ままり候は斬死  
 を加りりるの端むべき若者ると世の人ぞて練りる

信長焼延暦寺事

河州小谷の城を以て守長政のいふにして信長と云と  
 本願寺門徒を招ひ兵杖と勅せしよ本下後若郎がひな中と

働き小一揆を敷亂し長政が志と遂に却て信長と遠眼と  
 近道日信長遠國働くはと覚悟ししが諸方の要害若  
 を教多にしら入舟を築く合戦の利をりく信長を  
 受てさうが河州(後向)して後舟と討死しとく同年八月十八日又  
 万余騎と列陣し河州佐和山を以て居候と本  
 陣と別く宿り終り九月朔日志村の城とあて城を志村焼後守  
 を退落し六百余級のをと得たりけ軍威は響きし小川の城  
 令本林の城皆信長は降参し日月十一日撤回し坂き山園玉林  
 が鍛又宿陣あり日十三日法觀山延暦寺を焼捨山一の無後  
 等一人も残らばお殺せしと知せる討は多欠同右門尉信盛  
 武身肥後入道夕菴等誘りてヤツるの抑は觀山と中川の城



善学大道路場を武両門の新地として勅切不退の靈地なり  
是又後くいふへより弘隆の佛威又つもの山との衆徒我志又  
但し可致しうびされが上代の希望も朕が心も但せぬあり  
双六の塞鴨川り多山法師之と宣ひ度くれ狼籍と宣失の  
て穩便に指差給ひぬ我今是を正し給らん國家の旧章も遠  
ひ天下の人等も宵る也」と言と處して諸れ々れども信長も  
酒りて教方の軍兵に下知を傳へしにも又廣き天台山を福麻  
竹葦のぞく又丸圃と岡の夢山谷小勅搖しかつつきて美上  
る山門三々の大衆谷く又相支へ防ぎ我ふとくもあまの六軍  
事ともせ給切捨く美よりるや奪く又火と押さばおろし  
廢凡烈く吹く山王三十一社を正しめし根中堂種接續免

院く寺く靈佛名像經卷聖教ひとのも妙く只一斤の煙と  
遊張る傍後多と追浩く披し出ととくく前と劔山門破  
滅のありさま言語る別あまにありし次才之信長は東坂の大  
名其の下又馬と立一山の燒盡とよて大さ小笑ひ去年朝倉後其  
又一味して我軍と苦しめたる恨もあひ知りつんと歎息せり  
糾りて信長の妙思なる先とて其余と知るべし

宇治橋渡合戦之事

信長は叡山と燒盡し又軍兵とまとめて岐阜の城より  
相三年元龜三年の如州の渡井と我の善し渡井の本城を相  
のる虎津若らへ向ひ城と據き本下差若郎と守内し小糺  
合して三年の如し收明年元龜三年改元ありて天正元年と号



のよ  
信長  
松原の城と  
美る

南無阿弥陀仏

以て討伐并朝倉等ノ大軍を相結し折を頼ひ濃州へ討入んと  
 して横州へは中野寺門後等勢州前ノ國司と心を合せれと  
 ゐんと企てそ外日國長崎伴賀の腹郡紀州雜賀等との一揆  
 とも勢ひをそろひ加へ甲州の武田信玄も三州と出張して信長  
 を夷人とし濃又若後尾右敷等々方よりしては信長軍謀  
 又心と告し計略の工事を凝し以折長系都乃新將軍義昭云  
 何なるやと云信長と悪し多し小回家退討の御教書を  
 國へはし下されは州の雲田石山と構へ信長を討ん御計  
 策えきり之信長安うはひさへ軍勢とさじの計まらね  
 軍と討そがえんとく柴田を明智の三郎小治郎して雲田石山  
 の西嶽と夷討むる小何と強勇の軍あるは只二日の間

西嶽を夷討し信長へかくと後進以節甲州の武田信玄病死  
 しては信長大に不敵に忽数万の大軍と備へ三月廿八日軍  
 を討せんとる後阜をきて上洛は日廿七日入洛して東山智恵院  
 又中陣を居らば諸軍勢は白河栗田は祇園法ある波野羽  
 竹田辺より亮濃と軍威濃又中陣難くぞ見よるお軍は休  
 又後き多し俄に都と用き上洛は濃の城へ入らせ給ふ是は依て  
 信長軍勢と引く上洛小引りみケの衣柳山又中陣を居は橋  
 濃勢城の奴系一人も跡なきに打殺せよと申せしは多し折は  
 上洛川のみ多く濃は諸軍後して見て見合せると信長怒り  
 いふへは河を一番又後して上洛川の先陣とを名するは忠綱と  
 綱とくも鬼祓といはれ後には勝る例あり諸軍懸て後

らど信長が一奮又後とつらいつらと夢を励はし下知あるは夢う  
 應じて武者一騎の綱のひき一報何て川へさしお入て掘川  
 弥三郎今日の先陣なりと叫びて争り込く後には小  
 編系秘伝加え安石取丸毛市橋我者しと打返るは  
 見く又その傍より柴田多久同本中計多を輝屋明智細  
 河ひくくとお咄「悲勢合て又万余騎太に揃ひ一時又開と他  
 掃よりんで表より多り城兵力と盡し防ぎ戦ふとくも争ひの大  
 軍物の殺しもせし中より柴田勝家多久同信登輝谷が勇  
 をふるふく外構又系入と見し「がたや方く又火とりけりお軍  
 今又詮方なり命をとりと終りとの御詫云うて城をさす降参  
 し終り信長先と殺「せんちや多ると明智先秀本下秀の古

ましまくと又謙云中河州表の三好義次が方へ送る事  
 まより又同國邊の城を表岩成を祝成と討え芥川の城又向  
 てい和同傳賀守と殺「そ外池田備後守修丹兵庫次多お軍の  
 御方や也」とも悉く討平け摂州悉く静りたり荒本村を  
 を摂津守又あ八月に日濃州岐阜へ帰城せらる其後ひ謙又  
 勇しくけん又たり

刀狩坂合戦山崎長門守討死之事

日月八日に州虎御茶山の城代本下及右即秀右お入て進  
 し多るい懐井が附城山本山とせしめし満方の城へ悉く懐井及  
 殺き御方又参りていけ討を突つた又く江州表へ御出馬ありて  
 志うりしとや多し信長望てきくは只今出陣とてとて又



信長の大な山やま獄ごく  
の城しろを攻せめ取とる

信長大山獄の城を攻め取る

彼阜嶽と立て別虎河赤山より陣せらるる其懐尾張の軍兵傳  
少然しくと馳参りやぶ小督附が向ふ又万余騎又ぞ加うに多  
後井長政大木小督も急ぎ旗本の朝倉又後浩と云ふ朝倉  
義兼自刃三万余騎の軍兵を降し山田の地田津ふま陣と布  
同勢の地赤山余音の庄本が辺に陣をえ其外大嶽焼尾丁理  
勢嶽うんどの要要害又悉く砦を構へ朝倉後井の軍士と勢  
らせ足將をゆりて鉄炮雜合又殺目を過しぬかくれど味方  
軍威を張て對陣せし朝倉後井の陣中へはつりしり  
軍勢弱矣小田方へは日毎に多勢と加う勢は朝倉後井が  
け合戦こそ是れはしとさやくやぶ小焼尾の砦と固めたる後見  
但馬守忽心がまじしと信長は降参り是と云ふ旗本勢の英

氣と失ふ不るり小田月十日の夜風雨とげしく雷電駭しく  
とさき朝倉方より構うる大嶽の砦の矢倉又雷津原も忽  
火燃しる後小田勢火と散りんと騒動は氣なるやき信長是と  
見く自軍勢を引く大嶽は押せ搦りんで攻る後小督附  
がる小大嶽の砦と表裏しれ勢ひは際して丁理後嶽とも退  
落し其勢ひ弥盛んとて天磨岩赤山も當りかゞぞ見へる朝  
倉義兼も引勢を見て大木懼れ他國の合戦味方のるに利か  
はしいと旗本引退き要害を守て款を乞ふとて十日の寅  
の越え田津山の陣を拂ひ柳ヶ原にして引勢と信長通てかく  
みんとみ碓りして待たるればと退けて一人も残さず討えり  
自馬と美先と近出せば誰う留りみ余と入き際と吹立を旗と





山崎長門守討死



乃孫坂  
合戦  
山崎長門守  
討死

日本書紀卷八

十五

鳴「我芳」と馳りたる去やど小朝倉義系に柳瀬に留り  
 体段「家臣と集りて各角の詮議」たりたるが如老山崎長門  
 守河をそりくと流して中なる今度には州へ海へと出馬はなま  
 ひたるいといふは當に運令の盡ぬる事と覺(い)てても死るん令る  
 らば先祖相傳の本國とて款を引うけ死にしく一軍「腹切て武  
 名と令りせんこそ寔に武の期とるをたひ小田勢のこゝ正回口と  
 切大軍法より退きりし其の切不れたるは又治裁より討記  
 仕べくいへ其間又急で報来り引させ給ひ心安く御扱めさ  
 りへは」是ぞ主従の御服をうそいと中捨て馳出たり義系もこ  
 とが別とのうはして退きうひてあつると一族朝倉掃部女馬  
 引よせて義系と抱きのせ給とも死に給して退きたる大おかくの

ぞくわれば熱軍一日は騒ぎ立我きたり引えんと右姓老健に推  
 合宴合おるは雨後のさくわれば去階は踏陰とどる倒して糧の  
 毛さ入るまうは或は傳具足は要してな足と換じ馬武具と踏は  
 捨えんぐよ如く交りたるい足若「如也」次第はは時信長の軍  
 更烟とよそく退きりし是先は應惠多政九勝門内は内茂は  
 田令九勝門を過る款を喰とめくひと切は切捨嚙き叫んが  
 退討不に山崎長門守刀袷坂の切不にえて久し坂のよより去  
 一又空の突落「巨角八面は當り飛龍廻天虎嶮山崩の威と  
 ろる小田の大軍とよひて計退りしは不そ討記」名と後代  
 又止めたるそ外安をて戦記より勇士三十八人雜兵の討記を教と  
 知べくは小田勢餘いせんも本因幡と退討たりがけ不に踏歩

返し合せ戦ふ勇士朝倉三郎曰夫は即河合安藝守徳兵衛後  
身と比せしに十余人悉く討死に信長承く廻て六より三  
難く城系敷かきの味まゝ追討より元江州大嶽の陣よりして  
敦賀の宿より別て十一里の杉原其より小斬捨る死尸連綿と  
く終向く幾人との隙を去り討死首級の大抵三  
八百余級と帳面には是れしなり

朝倉義系濱出長政より生害之幸

叔と朝倉九郎門督義系は八月十六日居城一系ヶ谷へ着陣し  
ころが小田の大軍より敦賀表へ別居し重く城系へ死入るは  
罵りて國中の士農工商老若を掛け切きと抱き東西より  
南よりともよひ同もあてらるる反叛勢之義系是と見てとて

い城よな城を捨て大井郡美山のやうりより東雲寺より入る方よ  
みをくしてせまり居るは一族美山の城主武部吉兼親  
忽逆心と配し平泉寺の衆徒と密に東雲寺と五圍に迫つて  
義系は生害とともむ義系大に憐れとつても勢は洗はぬ  
別てはわざとにべきは御もろく版搔切て配しよりころ武部吉  
兼親義系が首と掲げて信長へ渡さしむるは信長歎法解め  
るは生害と長谷川宗仁は信て京都よのげ三系河合に  
て御門よあけらるるは叔も城系一圍とくく平定しけしむ  
系九郎を捕今度義系と殺し一番は味方より取りたる  
忠節第一とく掛田極摩守と改名し城系一圍の守護代  
して一系谷よじし是より小田の城より別居九郎治郎本下助左



朝倉義康  
東雲寺

生寫

朝倉義康

勝門明智十左勝三人を止めて政目を司し四月廿六日信長  
軍勢と引て再び河州を立ゆり虎津若山の城を着城し於  
是廿七日木下辰吉即秀を命じて系極陣ぶつとつふふへ  
人殺を押し上げ小谷表の城并久政と其子長政が居不を  
切信長自大軍と立て久政長政と換桶のどく丸團一日一夜  
自軍をも絶せし美治より下押守久政今我運命も盡し  
とく家臣と集め美治の酒宴とはじめたるは朽く久政自  
情と受けたる鶴松をまとの徳師あり久政の盡と中受双眼  
涙と涙も今日の盡とそつんくもりも赤く頂戴仕ると引  
更く三盡吾能と用き埋本の花咲よりなうしよ方の  
果そ表と之つろと義とほしうりたるは一應貞と借し志がく

盡とめぐしを極矢とけひの夢鉄炮の音次第と冷はしく今  
かよと見へるやと久政執てより肌服服一文字と切つる  
鶴松をまのひくも女端しを共も共も腹押切刀の切先と咽  
と推當うらぶしよ却て死よりうけ付け後守長政も美期と亮  
妻女も三人の女ると流る信長の陣へ送りさる是の長政の妻女  
も信長の妹なりはかりにしよ其雄の信長も徳若の固をもとひ  
てや不破河内守と役として長政へ中送りさる武門の若い年次  
合戦をいづも今日の仕合せ是流る及びさるる信長が心屋  
抄ひていさう跡意の依をなせは長政退城するふ抄ひて助  
命の依お遠るさうはと意は又守へたるは長政は附久政が  
害しと知り流るさうははるふしてふと一帯に後切を

とりけりまゝに石破がとち小谷の百人余の士率と後(小谷の城  
知るる名に一昨日守久政院又切腹ありは)若く者あり  
くれば長政大さ小谷のさ板い出ぬまゝに訣のまに後され後せ  
らまゝの末代との悪名とくお良赤尾英他守が殺し入り入  
て後又切腹して死するまゝに切腹しは州一國忽は信長が飲不  
とあり小谷の城を本下辰吉郎秀吉小幡り且十二万石の石破  
を完せり其外に州の仕長も悉く下知せり且九月二日  
軍勢とまゝに濃州岐阜へ帰城ありたり

城を強劫横州本教寺新築城用志す事

け年の冬城を圍又しく本教寺門後の一揆降院して國中強劫  
其後ありまゝと爲る小朝倉家滅亡の後桂田攝摩守一系ヶ谷

又生城して國政と執りしは私欲乃らるまゝいのもまゝりたるは百姓亦  
恨も勝りえより加城の兩國先多より親密宗の門後殺しく  
教多の郡村本教寺の飲不之門後の輩も又城をのろまゝ  
まきよわびけけ附本教寺宗の門後等相議しつる桂田攝摩  
り朝倉家善代の長下としく忽信長よ心を通じし人義系  
とこせし系言語道断乃らるまゝいかり朝倉の我本寺攝州本  
教寺新門後の國方れが身命て我くが怨敵信長より先(け桂  
田と討殺せと教方の門後一揆をぬ)一系ヶ谷へ押よせ翌秋三日が  
同息をり後後美よりつる小桂田力盡き城中の柳の馬場にて  
一揆のぬる斬殺より小谷を在城せし小田家の武士河田九郎治郎  
本下助九郎門明智十左衛門打をひてけ信長へ進進



本丸寺一揆  
掛田掃磨守  
を殺す

信長通てより國中一揆の發らん事を察し徳と朝倉の海軍  
 田を以て守護代と爲し兵を以て一揆の兵と偕て殺せんと謀るる  
 ことを謀りて元々より一揆の本中明智等小將を以て一揆の  
 合戦を以てし兵士を以てし故阜表へ引をせしと中知あり  
 たりしが三浦信長は即日兵を以て横州へ向國し其れは信長  
 又は一軍を以て本教寺と討の名と近く横州表發向のは内  
 下知を以てし其れは密に横州石山乃河堂へは強と告ぐるる  
 軍多かり其れは密に横州石山乃河堂へは強と告ぐるる  
 通てよりかくみんと是悟し其れは石山の人の其れは其れは  
 やとく先河分口の若くは下河利部教庵二万余人をしてこれと  
 圖り樓岸の城は番西城後守二万余人本陣は下河利部進

仲之志摩に即岩倉兵部を二万余人難波は一宮徳盛守  
 野田は板浦武部を二万余人今と蘇我二万余人の此石山  
 本教寺と守護し互に急と殺し其れは其れは其れは其れは  
 大いし鈴木を以て自ら先と守り附助の勇士を以て河辺を  
 馬女等を以て右の翼と爲し大石大木と伐と殺と討の隙を以て大  
 筒小筒鉄炮教子挺挾間の如くけりて弓矢を以て其れは其れは  
 磨き防禦の備人敵を以て其れは其れは其れは其れは其れは  
 ぶくも其れは其れは其れは其れは其れは其れは其れは其れは

繪本拾遺信長記初編卷之八終



圖本信長言初卷

九三

